

アルフレッド・マーシャル

一 マーシャルの二重性格

アルフレッド・マーシャル Alfred Marshall (1842~1924)をその著作を通じてしか知らないはずのわたしどもにとっても、その人柄を身近かなものとして感ずることのできるのは、その弟子たちの書いた追憶類、とくにケインズ John M. Keynes の傑れた「マーシャル傳」によるところが多い¹⁾。ケインズの「マーシャル傳」は、マーシャル經濟學の形成の祕密を人間としてのマーシャルの内面深く沈潜して究明しようとしたもので、類例の少ない傑れた評傳である。マーシャルを完成した經濟學者として仰ぎ見るのではなく、その理論創造の過程をマーシャルの内面で相争っていた二つの魂を對比させながら畫きだそうとしている。そして血肉の通った人間像を

馬場啓之助

つくりあげているのである。まことに調子の高い、文學的な香氣をもった評傳である。

ケインズはマーシャルを評してこう書いている²⁾。

十九世紀末期にケンブリッジで道徳科學の講座を擔任したかれの二人の同僚、ヘンリー・シデウィック Henry Sidgwick とジェームス・ワード James Ward と同じく、アルフレッド・マーシャルは聖人牧師の部類に屬していた。しかもかれらと同じく二重の性格を有して、かれは同時に科學者であった。説教者また牧師としてかれは他の同様の人々より特別に秀でていたわけではない。科學者としてかれは、その専門の領域において最近百年間における世界の第一人者であった。それにもかかわらずかれ自身が重要視したのはこの第一の性格であった。この

第一の自我こそ主人であるべきで、第二の自我は召使であると、かれは考えた。第二の自我は知識のために知識を求めたが、第一の自我は實際的進歩の必要に理論的興味を従属させた。驚の鋭眼と廣翼はしばしば道學者の命令をきくために地上に呼び返えされた。

ケインズはこの二重性格こそマーシャル理解の鍵となるべきものと見た。「マーシャルの長所と短所、かれ自身の目標の動搖と力の浪費、またかれに對する二つの評價、すなわちかれに寄せられる同感と反撥³⁾」——これらはすべてマーシャルの二重性格に發するのだ。そう考えて、ケインズはこの内面の葛藤を中心としてマーシャルの人間像を動的に畫きだしてみせたのであった。

悠容大河の流れるとき感のあるマーシャルの『經濟學原理』*Principles of Economics* は、一氣呵成に讀みくだす情熱を起させるものではない。この書物から讀みとれるマーシャルは、古典的な安定感を保ってオリンピックの高みにやすらいでいる。ケインズは、そういう古典的なマーシャルの背後に内面の分裂に苦闘する苦行者の姿を畫きだしているのである。「マーシャル傳」は『經濟

學原理』と際立つた對照を示している。この對照こそ、社會科學としての經濟學のあり方について示唆するところ多い。經濟理論の専門の領域において、マーシャルの『經濟學原理』は後來の理論によって批判にさらされ、その理論は多くの部面において陳腐なものとなっている。けれどもこの『原理』の背後に潛む經濟學者としてのマーシャルの苦闘の姿は、經濟學の研究を志すものにとって人間的共感を呼び起さなはずはない。「マーシャル傳」あるがために『經濟學原理』は、その古典的な安靜から搖り動かされて、創造のための苦闘の記録として永く讀みつがれていくことであろう。マーシャル理論の最大の批判者の一人ケインズが、その「マーシャル傳」によって『經濟學原理』への興味を永續的なものに高めているわけである。

マーシャルの二重性格は、道學者と科學者の葛藤となつて、その經濟學の形成過程を彩った。科學者としての資質は何よりもまずその數學研究によって培われた。ケンブリッジのセント・ジョーンズ・カレッジに學び、一八六五年數學優等試験を第二位で通過しているマーシャルは、シュンペーターの證言によれば、同時代の數理經

濟學者の誰にも劣らず、數理解析の能力をもっていた。⁴⁾ そういうかれが、古典派經濟學の分析論理を數理的に吟味して、精密な分析用具を鍛えあげることが容易なことであつたろう。じじつかれは一八六七年すでにリカルドの推論をできるだけ數式に翻譯して、これに一般性を附與しようと努めている。⁵⁾ 欲するならば、かれは年少すでに數理經濟學者として一家をなしていたことであろう。しかし數理經濟學者として終始するには、かれは社會哲學者として豊富な現實感をもちすぎていた。かれは經濟學研究の目標を、社會における人間の完成を促進することにおいていた。

數學をもって學窓を巢立つてのち、マーシャルはケンブリッジのセント・ジョーンズ・カレッジのフェロー（一八六五―七七年）となったが、一八六七年にはグロート・クラブに加入し、同時代の社會哲學者と交わりを深めていった。時代はまさに進化論の衝撃のもとにあった。人間性の形成に及ぼす社會環境の影響に注目することが、當時の風潮であつた。マーシャルもまた人間の持つ可能な資質を伸張させるような、社會環境の育成こそ社會哲學上の基本問題であると考えた。そのような環

境の構成要素として經濟的條件の重要性に気づいて、經濟學研究に志したのであつた。特に貧困なるがゆえにその能力を伸ばしえず、そのために生涯貧困より脱却できない労働者の境遇の改善こそ、經濟學研究に託された社會的目的であると見ていたのである。

マーシャルは一八六七年から一八七五年にいたる時期を、その經濟學研究の「徒弟時代」と呼んでいるが、かれは誰か一人の經濟學者に師事し、その「徒弟」となつたわけではない。かれは前述したリカルドのほかミルの『經濟學原理』に傾倒し、これを學び直すことで、經濟分析の論理を鍛えあげようとしていたけれども、かれが眞に學び知ろうとしたのは生きた經濟の現實そのものであつた。産業經濟の事情を廣く調査して、労働者の賃銀形成を規定する要因を明らかにし、どのようにしたならば、労働者に人間らしい生活を保證し、その人間完成を促進しうるかを知ろうとした。調査資料の蒐集が今日ほど進んでいない當時にあっては、これは大變な仕事であつた。マーシャルはイギリスの經濟事情を廣般に調査したばかりでなく、一八七五年にはアメリカに經濟調査のために旅行している。リカルドやミルの再吟味によつ

て身につけた經濟分析の論理も、これらの調査資料に照し合せて、その人間生活にとつてもっている意義を明らかにするまでは、經濟學上の成果とはならないと考えた。マーシャルの晩成の理由が、そこにある。

人間生活の向上という廣般な實際的目的と精密な科學的分析とは、ただ豊富な實際的知識の累積を通してのみ、その結合の可能性が拓かれる。これがマーシャルの初期の見解であつた。しかも仕事をすすめていくにつれて、ただ實際的知識の累積だけでは、その結合がとどきおりに進歩するものでないことが、しだいに明らかになつた。これは後述するごとくであるが、いづれにせよ、その二重性格は、かれの經濟理論の形成のためにじつに骨の折れる仕事を課したことになる。もし目的の構圖が、何らかの哲學上の理論的圖式をもつて整理されておき、これと經濟的分析理論とを結びつけられ、そこに經濟學の體系が形成されるというのであれば、マーシャルの「徒弟時代」は短かく終つたことであらう。しかしそれはマーシャルの場合ではなかつた。

マーシャルは形而上學から倫理學に轉んじ、さらに再轉して經濟學研究を志したのにちがいないが、それはマ

ーシャルが何らかの哲學說ないし倫理學說を豫めもつて經濟學研究を企てたという意味ではない。マーシャルがヘーゲルの歴史哲學、スペンサーの社會哲學あるいはベンサムの功利主義說を注意深く研究したことは事實であるが、それらのどれかがあたえる哲學的構圖のなかにその經濟學說を組み入れたという事實はない。それがドイツの歴史學派やマルクス主義と、マーシャルとの相違點である。マーシャルにあるものは、ただ經濟學說だけである。しばしば異質的と思われるものを、一つの經濟學說のなかに凝集してとらえようとしたのである。

マーシャルがその「徒弟時代」はほぼ、アメリカ調査旅行からの歸國をもつて終つたとみたのは、新しい經濟理論形成に必要な資料蒐集が一應の成果を収めたことを物語っている。残る仕事は、古典派理論の再吟味によつてつかまれた分析論理を實際的知識によつて檢證し、肉づけすることである。しかしその理論體系が『經濟學原理』として刊行されるまでには、なお十五年を要した。

この間、マーシャルは一八七七年にはケンブリッジを去つてオックスフォードに移り、ブリストル市民大學主事(一八七七—八一年)兼經濟學教授(一八七七—八二年)、バ

リオルのフェロー兼經濟學講師として經濟學者としての地位を築いていき、一八八五年にはフォーセツト教授の後をおそつてケンブリッジに歸り、その經濟學教授に就任している。また一八七九年にはその第一著作『産業經濟學』*Economics of Industry* が、夫人との共著の形で刊行された。ケインズはマーシャルの經濟學がすでに一八八三年頃には體系的なまとまりを見せ始めていたものとみている。じつは一八八五年のケンブリッジにおける就任講演では、明らかにマーシャル經濟學の核心が示されている。マーシャルは「經濟學の現狀」(*The Present Position of Economics*)⁶⁾を論じて、經濟學の課題とそれに對處する態度を明らかにした。われわれはそこにマーシャル經濟學に對する最良の手引きを見出さう。

マーシャルはこの講演で、まず十九世紀中葉以來生物進化論の擡頭に伴つて社會科學の方法論が變革してきたことに注意をうながしている。人間性はけつして萬古不變のものではなく、社會的環境とともに變化するものである。これはスペンサーがその社會進化の理論をもつて究明したところであり、またこれをもつてベンサム流の功利主義に批判を加えたところのものでもあった。經濟

學の分野にあつても、レスリー Cliffe Leslie がスペンサー理論にたつて古典派經濟學の人間觀を批判した。マーシャルはこれらの批判の由つてきたる思想的理由をよく理解した。かれもまた社會の有機的進化を信憑していたのである。しかし有機的進化の思想だけで經濟學が形成されるわけのものではない。經濟學にはそれに固有な方法論理があるはずである。

マーシャルはスミスが經濟學を一つの科學として成立させたのは、この固有の方法論理を發見したがためであると見る。その方法論理の核心をなすものは、經濟行為の動機を價值をもつて計量することにある。經濟價值の表彰として貨幣が社會的に通用している場合は、これは經濟行為の動機を貨幣量をもつて計測することでもある。このことは何ら特別な人間觀と結びつくものではない。社會環境の變化に伴つて、人間性にもまた歴史的變轉があつたとしても、社會生活の一分野にあつてその行為の動機が貨幣をもつて計量されるという事實には變りはないはずである。經濟學者はこの事實に注目しなくてはならない。社會の有機的進化を信憑するからといって、この經濟の固有の論理を無視することは正しくない

い。

マーシャルはこのようにしてその経済學の兩極を示した。經濟學者としてのかれの具體的な仕事は、この兩極のあいだに橋をわたすことであつた。實際的な知識の集積は、疑いもなくこの架橋作業の有力な補助手段となるであらう。しかし經濟資料そのものは、理論によつて媒介されるのでなくては、何ら意味ある事柄を語るものではない。理論による媒介とは、マーシャルにとつて、資料の示すような事實が、計量性ある動機が漸次均衡していつて社會的事象として定着していくことによつて成立してきたことを明らかにすることにほかならない。マーシャルは事實をその特殊な局面から抽象して、これを典型的なものに還元して、そこに經濟法則のあらわれを見ようとした。かれは事實を知っているというだけでは、經濟理論の體系構築に必要な架橋作業ができるものではないことに氣づくようになったのである。

マーシャルはその「經濟學の現狀」においては、なおその架橋作業の具體的な内容については觸れていない。ただこの作業の重要さに氣づいていない歴史學派や、これを放棄して社會現象のすべてを包含した體系を一舉に

總合社會學として樹立しようかのように考えている社會學者に對して、批判を加えているにとどまる。その主張の積極的な内容が明示されたのは、いうまでもなくその『經濟學原理』においてであつた。一八八五年の夏の休暇からマーシャルは『經濟學原理』の成稿の取まとめにかかるが、それが完成し刊行を見たのは漸く一八九〇年のことであつた。このマーシャルの主著は、その分析理論の核心を均衡理論として定型化するとともに、このうゑに經濟社會の總合的な理論を積み重ねて、その有機的成長の過程を説明しようとしている。

數學者マーシャルにとつて古典學派の價值論を均衡理論として定型化することはさしたる難事ではなかつたろう。また道德哲學者マーシャルにとつて經濟社會の有機的成長の思想を吐露することは容易なことであらう。しかし經濟學者マーシャルの仕事は、この二つの局面を融合することにあつた。「徒弟時代」を終つてのちの十五年は、この仕事のために傾注された。マーシャルがこの仕事を成就しえたのは、まさに相反する二重の資質を同時に兼ね備えていたためであるが、そのことのゆゑにこの仕事は難かしいものとなつた。一八九〇年の『經濟學

『原理』の初版そのものにも、マーシャルはけっして安住していない。『原理』の第八版が一九二〇年にあらわれるまで、マーシャルは『原理』改訂の仕事をつづけているのである。この『原理』への傾倒が、その第三著作『産業と貿易』*Industry and Trade* (1919) および第四著作『貨幣・信用・商業』*Money, Credit and Commerce* (1923) の刊行をおくらせた。特に『貨幣・信用・商業』は、マーシャルがすでにその「徒弟時代」に創出した革新的な貨幣理論や貿易理論を初めて取まとめて発表した注目すべき著作であるが、晩年の執筆にかかるものであるために、清新な迫力を欠いている。このようにして、八十餘年に及ぶマーシャルの長い生涯の半ばは、他の著作を犠牲にして専ら『原理』のために捧げられたといつてよい。この『原理』とともにあった四十餘年はまたかれがその二重の性格と闘った時間でもあった。

1) エグウ編『アルフレッド・マーシャルの追憶』(*Memorials of Alfred Marshall*, A. C. Pigou ed., London, 1925) は、その第一巻に J. M. Keynes, F. Y. Edgeworth, C. R. Fay, E. A. Benians, A. C. Pigou の追憶文を収めている。ケインズのそれは別にその『傳記論集』(*Essays in Biography*, London, 1933, New ed. 1951) にも収録され

ている。

2) J. M. Keynes, "Alfred Marshall," *Essays in Biography*, New ed. p. 140.

3) *ibid.*

4) J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, New York, 1954, p. 956 n.

5) マーシャル自身の書いた自傳的ノート (J. M. Keynes, *op. cit.*, p. 151.)

6) 前掲『アルフレッド・マーシャルの追憶』に収録されている。

II マーシャルの革新

マーシャルがその『經濟學原理』で展開した體系は、經濟社會の有機的成長の過程を究明するために、人間の經濟行動の分析用具を秩序だてて配置したものであった。それは従来の古典派理論と對比してみれば、何よりもまず經濟社會の秩序に關する想念が相違していた。古典派理論にあっては、經濟社會には自然秩序が潜んでいてこれが人間の經濟行動を規制するといった社會觀が支配していた。自然秩序は合理的なものである。古典學派にとっては、この秩序の合理性を明らかにすることがその理論構成の核心であって、この合理性が同時に人間の

社會生活にとって合目的なものか否かについて、すでに吟味を加えるところが少なかった。

自然秩序の合理的なあらわれ方は、經濟法則のとりえんとするところのものであるが、古典學派が明らかにした經濟法則の基本的なものには、合理的ではあるが合目的とはいえないものが多かった。たとえば、人口法則、收穫遞減法則、賃銀基金説など、いずれも人間の社會的進歩に對する合理的な制約條件を示したものであって、進歩そのものを促進する性質のものではなかった。これらの合理的な法則の働いた結果もたらされる社會の状態は、リカルドがその動態論をもって畫きだしているところである。それは疑いもなく暗澹たる姿相を呈している。ただリカルドはこの暗澹たる歸結から脱却する道を、その自由貿易政策によって示そうとした。自由貿易はまさに經濟法則の袋路から脱するための、殆ど唯一の道であった。しかも自由貿易の合目的性をささえるものとして、リカルドが提示したものは、これが資本家の資本蓄積を促進するという理論であった。光明への道と思われた自由貿易政策も、資本家の階級主權の確立といった陷穽を潜めていた。

十九世紀中葉イギリスは漸次自由貿易體制を築きあげ、繁榮への道を拓いていったが、この繁榮のなかに勞動運動は次第にその地歩を固めていった。こういう事態にあって、古典派經濟學がその社會的意義を喪失していかざるを得なかったのは、當然の成行きであった。古典學派の唱えた自由貿易は實現したが、古典派理論では處理できない社會問題がおこってきたからである。しかも殆ど時を同じくして、社會進化の理論を唱えるスペンサー流の社會理論が新しい科學として擡頭してきたのである。これは古典學派の自然秩序に思想的批判を加えるものであった。古典派經濟學に對する社會的評價は動搖するほかはない。それを象徴的に示すものは、一八七六年にロンドンで「經濟學クラブ」(Political Economy Club)によって開催された國富論刊行百年を記念する會議であった。會議は各國の代表的な經濟學者を集めて、經濟學の將來を論じたものであったが、支配的な論調は暗い懷疑的なものであった。それはジェボンス William Stanley Jevons のこの會議の傍聴録の傳えるところによって明らかである。¹⁾ またこの時期にあらわれた經濟學方法論の數多いことも、この風潮を裏づけるものであ

る。經濟學に對する反省は懷疑的または批判的な色調をおびていた。時代はまさに經濟學の革新を求めていた。革新の中心は、經濟學をその自然的な社會觀から解放することにあった。新しい社會觀をもって、しかも科學的な方法を備えた經濟學の出現を、待ちももうける風潮が強かった。

マーシャルの『經濟學原理』はまさしくこの時代の要求に應えたものであった。『原理』刊行は専門の經濟學者の範圍を超えて、廣く一般の有識者によって温く迎えられた。一般誌に數多くの書評があらわれている。マーシャルが經濟學を社會改良のための用具として編成替えたことが、輿論の協賛を得たわけである。

マーシャルは古典派經濟學の前提となっていた自然的な社會觀を捨て、有機的な社會觀をもってこれにかえた。これは大きな革新であった。けれどもマーシャルの科學者としての冷厳な眼は、このような革新も經濟分析の用具の論理的秩序づけとしての經濟學の科學的核心そのものには觸れるところ少ないことを見抜いていた。古典派經濟學もその科學的核心においてはまさに經濟學固有のものをもっているものであり、それはかならずしも自

然的社會觀に依存しているものではない。かれはこのような固有の分析論理についてはまさに古典學派の繼承者である。かれは科學者として古典學派に負うところ多いことをよく知っていた。したがってかれは古典學派に對して革新を加えたにかかわらず、自らを古典學派の批判者として表面に打ちだすことを心して避けている。かれは古典學派の傳統の繼承者であり、傳統に新しい解釋を加えることで、これを正しく發展させる者だと考えた。

『原理』のどこにも古典學派に對する破壊的な批判は見出せない。言葉足らざるところを補うのだといった態度をとっている。好意的な、餘りに好意的な解釋を、先行者の傳統的理論に加えているわけである。

マーシャルの革新は古典派理論の再評價といった形をとってあらわれた。時代の風潮の變轉のゆえに經濟學に對する批判または懷疑に終始していた經濟學者とは、その態度を異にしていた。かれらの態度は一般の經濟學に對する不信を強めこそすれ、經濟學の信頼を高めるゆえんのものではない。マーシャルのそれは、經濟學の傳統に深く傾倒しながら、しかも時代の要請に沿った新しい體系理論を提示したものであったから、まさに經濟學の

信頼を回復するに役立つわけである。かれは意識してそのような態度をとったのではない。これはタクティックではない。その性格の流露である。マーシャルの二重性格がちょうど時代の要請に適合する形を生んだのである。人と時代の程よい調和が、そこにあった。

マーシャルはその『經濟學原理』の中扉に「自然は飛躍せず」*Natura non facit saltum*と書きつけて、自己の體系が古典派理論と連續性を保っていることを強調した。それにもかかわらず、マーシャルの主著によって經濟理論は面目を一新したことも、また事實である。マーシャルはもはや古典學派ではない。その革新の基本をなすのは、いうまでもなくその經濟理論の體系を經濟の有機的成長の過程の究明という根本問題を中心として編成替えしたことにある。この基本的な革新をめぐって、なおいくつかの理論領域において方法的な革新を加えている。それを要約風に説明しておこう。

第一、マーシャルの體系は二つの理論領域から構成されている。「經濟生物學」*economic biology*と均衡理論とが、それである。前者を展開することが經濟學の主要な課題であるが、この課題に應えるための方法的準備と

して後者が必要だと見たわけである。

マーシャルの經濟學研究の究極の目標は、經濟社會の有機的成長の過程における進歩と福祉の關係を分析することにある。この課題に應えるためには、經濟社會を恰も生物有機體のごとく考え、その生命力の成熟と衰退の様相を、生物學的方法をかりて、解剖しなくてはならない。それは經濟生物學の仕事である。經濟生物學は「經濟學における生物學的類推³⁾」を驅使して、經濟社會の總體的構造の解剖を企てるものである。それはかんたんにいえば「經濟解剖學」である。ドイツ歴史學派がロツシヤー Wilhelm Roscher 以來、經濟解剖學の樹立のために努力を傾注してきたことは、人も知るところであるが、かならずしも充分な成果をあげていない。マーシャルは國民所得の循環過程の分析を手掛りとして、この分野で新しい境地を拓いた。それは近代經濟學における巨視的理論の先驅となったものである。

マーシャルは經濟社會の總合的解剖は、無準備で企てても、その成果は期待できないと見て、經濟社會を構成するそれぞれの局面について、その機能を豫め分析しておくことが、解剖學展開の方法的準備として必要だと考

えた。それが均衡理論の仕事である。これは經濟生理學といつてもよいが、經濟の生理は「經濟學における力學的類推³⁾」を用いて、計量的分析を加えることによって、その機能を説明しうる。

第二、均衡理論において、經濟行動の計量的分析を企てるにあたって、マーシャルはさまざまな分析用具を創出して、經濟理論を精密理論に深める道を拓いた。その用具の代表的なものに、弾力性、長期と短期、消費者餘剩、準地代、均衡安定の條件などがある。マーシャルの『原理』の數學的附録は新しい分析用具の寶庫である。

第三、均衡理論と經濟生物學との融合を計るために、その分析の前段階にあつても、社會學的視野を攝取することに努めた。それは代表的には、企業組織とその運營の能力を重要視して、從來の生産論の面目を一新したことに示される。古典派理論にあつては、生産は土地・資本・勞働の三要素の結合のうえにおこなわれると見ていたのに對して、マーシャルは企業組織と經營能力が生産を規定する重要な要因であると見た。その結果、古典派理論が生産法則として收穫遞減の法則を強調したのに對して、組織と能力が生みだす内部經濟と外部經濟のい

かんによつては、收穫遞増がおこなわれる場合もあることに注目した。企業は一つの有機體をなすとみて、個々の企業についても成長と衰退の有機的過程がおこなわれると考へた。この分野でも、内部經濟、外部經濟、代表的企業、主要費用、補足費用などの新しい分析用具を案出している。

第四、經濟社會の有機的成長の理論を展開し、「生活基準」standard of life の向上こそ經濟成長の支柱であることを明らかにした。ここでマーシャルのいう生活基準とは、經濟活動の供給態度のことであつて、それは具體的には企業者や勞働者の經濟活動の供給價格の高低によつてつかまれるものである。マーシャルは經濟社會の有機的成長の過程における社會福祉の問題を重要視し、分配の正義の確立に努めたが、正義といった超越的理念をそれ自體として論ずるよりも、むしろ正義の確立が人間らしい生活を保證することによつて、經濟活動の供給態度を向上させ、生活基準の上昇を呼び起すといった關連を強調することを怠っていない。かれは經濟騎士道という形で經濟倫理の唱道に努めているが、外在的な倫理基準で經濟を律しようとしたわけではない。その點、ドイ

ツの後期歴史學派の倫理主義とは、異なる用意をもって
いた。マーシャルはあくまで經濟學者であつたのである。

この要約的説明は、この説明方法の制約から、解説的
な裏づけを缺いて、納得のいかない點もあることと思
うが、そのすべてについて解説を補足することはいまの仕
事ではない。理論の性格を最もよく示していると思われ
る有機的成長の過程のつかみ方だけについて、節を改め
て説明することにしたい。爾餘の點については、別に解
説したところに譲るほかはない。

- 1) W. S. Jevons, "The Future of Political Economy,"
Fortnightly Review, Nov. 1976; Now in his: *Principles
of Economics*, Henry Higgs ed., London, 1905.
- 2) 拙著『經濟學の哲學的背景』(同文館、一九五二年)第六章
の二に詳しい説明がある。
- 3) A. Marshall, "Mechanical and Biological Analogies
in Economics," *Economic Journal*, March 1898; Now
in: *Memorials of Alfred Marshall*.
- 4) 拙著『經濟學の哲學的背景』第六章、『經濟學初歩』(同文
館、一九五四年)第四章、『經濟學方法論』(春秋社、一九
五六年)第二編第五章、『經濟思想』(評論社、一九五八年)
第七章第三節参照。

三 有機的成長の過程

マーシャルが經濟學研究を志したそもその動機は、
人間完成を制約する經濟的條件の重要さに氣づいて、こ
れが調整のための理論的據りどころを發見しようとする
ことにあつた。しかし人間完成といった理念はあまりに
も廣般であつて、それ自體では經濟學研究を導く指導的
原理とはならない。これに限定を加えなくてはならな
い。その限界の仕方は、社會文化のなかで經濟という領
域を明確にし、これと他の領域との關係を規定するとい
った形をとらなくてはならない。わたしはこういう限定
の仕方を可能にするものを、限界概念と呼びたいと思
う。もちろんマーシャルは明示的に限界概念という言葉
を使つてはいない。しかしマーシャル經濟學の限界概念
とみてよいものが、明らかにある。わたしは「生活基準」
の概念が、それにあたるものと考へている。

マーシャルの「有機的成長の經濟理論」は生活基準と
いう限界概念を中心として組み立てられている。生活基
準というのは、經濟活動の供給態度にかかわるものであ
ることは、すでに述べたところであるが、マーシャルは

これを生活欲求の充足と對比しながら、その意味を明らかにしようとした。「活動」activitiesと「欲求」wantsとは、マーシャルにあっては對概念なのである。もし欲求を充足することが目的で、經濟活動はその手段であるならば、活動そのものにはそれ自體の價值はない。活動の意義は欲求充足といった外在的な目的に照してきめられるだけである。生活欲求の多様化と深化につれて、欲求充足の水準の上昇が要求されるであらう。マーシャルはそれを「安樂基準」standard of comforts の上昇だと見る。そして安樂基準を生活基準から鋭く區別している。二つはむしろ對立する概念なのである。

安樂基準の上昇があったとしても、經濟活動はいぜんとして生活欲求の召使であることには變りはない。それ自體で價值をもち、意義あるものではない。このような場合には、經濟活動のなから人間性の充實とか傑れた性格の形成とかいったことは生れてこない。また經濟の有機的成長といったことも起らない。たとえ消費生活の向上があったとしても、それはそのまま經濟の向上になるわけのものではない。それ自體に價值のないものが、何を基準としてその向上を計ることができようか。

このように考えてみると、經濟の有機的成長を論議する論理的な前提として、經濟活動に意義を認める能度がなくてはならない。それをマーシャルは生活基準と呼んだわけである。それは經濟活動を欲求充足の召使としてではなく、それ自體に意義あるものと認める態度である。經濟以外の社會領域では、藝術にせよ教育にせよ政治にせよ、それ自體の價值基準があつて、その領域における人間活動に獨自な意義づけをしている。獨り經濟だけにそれが缺けている理由はない。多くの才能あり、識見ある人々がその生涯の仕事として經濟活動を選んでいる以上、この活動領域にも、他の領域と比べうる價值基準がなくてはならない。優秀な企業組織をつくり、新たな産業を興すといったことは、他の文化活動に匹敵せうる意義をもっているはずである。マーシャルが生活基準という概念でとらえようとしたのは、まさにこのことなのである。

マーシャルは生活基準の向上をささえる主體的要因を經濟自由 economic freedom に求め、それが生み出した社會形象を「自由な産業と企業」のうちに見出している。これはいわばマーシャルの經濟史觀を示している。その

具體的な展開は、その『産業と貿易』のうちに果されている。この經濟史觀を裏づける經濟理論はもちろん『經濟學原理』のうちに求めるほかはない。

生活基準という限界概念を分析理論のうちに内在化する指標は、經濟活動の供給價格である。生活基準の高低は經濟活動の供給價格をもって計測するほかはない。さらにまたこの供給價格は廣義における賃銀——財産所得を除いた勤勞所得——によって計られる。經濟成長の指標は勤勞所得の高揚にある。こういつてしまえば、事柄はきわめて明瞭であるが、マーシャル理論の含蓄は失われる。その含蓄は何よりもまずマーシャルが經濟成長を「有機的」成長と呼んだことのうちにある。

有機的成長は「組織」と結びついた成長である。個々の經濟活動の供給價格も組織を場とし、これと一體となつて、その高下が規定される。マーシャルは組織として具體的には企業組織を考えている。個々の經濟活動の供給價格もただ優秀な企業組織と結びついてのみ向上する。しかし優秀な組織と結びつくためには、その前提としてこのような組織をつくらなくてはならない。組織は天與のものではない。それはまさに經濟活動の結實であ

る。

このように見てくると、生活基準の向上は、第一に、優秀な企業組織の創出、第二に、この組織に關連ある人の經濟活動の供給價格の上昇となつてあらわれることがわかる。したがって經濟の有機的成長の過程は、第一に、組織形成に伴う企業者利潤の成立、第二に、その利潤の賃銀への轉化を通しておこなわれることになるが、マーシャルはその轉化を説明するために、準地代の概念を用いているのである。

組織の創出ないし擴充は投資を伴うが、マーシャルは資本そのものが生産性をもっているとは見ていない。資本の使用の仕方が生産性に關連するのである。それもボーム・バヴェルク Böhm-Bawerk の説くように、ただ生産期間が高くなれば、生産性が高まるわけではない。生産期間は長くても生産性の低い生産方法はいくらでもあるが、そのような生産方法は、迂回化に伴つて利子負擔が嵩むので、企業組織のうちに攝取されない。したがって企業が採用する迂回的な生産方法は、利子負擔に耐えるだけ生産性の高いものに限られることになるが、この事實を見て、迂回生産の利益を説くことは、原

因と結果をとり違えた誤謬を犯すものである。²⁾ 生産方法は、その生産期間が長いためではなく、内部経済ないし外部経済を喚起し、組織の改善に役立つ限りにおいて、高い生産性を生み出すのである。生産性の向上は利潤をもたらず。この利潤は、まさに組織の優秀さの證左である。

新投資はその限界において、利潤率が利子率と均等となるまで続けられるが、企業組織にはもちろん利潤が成立する。この利潤は組織の生み出した生産者餘剰に對應するものであるが、組織が確立して後は「複合的な準地代」の形をとってくる。ここで「複合的な準地代」というのは、社會がその企業を存続させるために負擔する機會費用——その企業に投入された資本や労働を他の企業に投入したならば成立したであろう粗収益を確保しうる機會を犠牲にして、その企業を存続させていることになるので、この粗収益がその機會費用になるが、これに——に比べてその企業の粗収益が超過している、その差額のことである。この企業が雇用に對する労働報酬を引上げれば、その企業の経費は増大して、純収益として企業に歸屬する分は減少するであろう。しかしそれは「複

合的な準地代」の内部の形態が變化しただけで、準地代そのものは減少しない。否、マーシャルはこのような準地代の形態變化こそ、經濟の有機的成長の正常な様相であると見ている。³⁾

有機的成長の過程は、圖式的にいえば、新組織の導入による利潤の成立、組織確立に伴う利潤の準地代への轉化、準地代の賃銀への移動を中心とする形態變化といった階梯を辿って、經濟活動の供給價格を向上させていくことにある。この企業組織を中心として見られた過程は、さらに産業經濟の全般に擴充される。國民所得の循環過程を分析して、古典學派の賃銀基金説に批判を加えたことは、人も知るところであるが、そこでマーシャルは賃銀の上昇は労働者の生活基準を向上させ、その労働生産性を高めて、國民所得を増大させることによって、資本蓄積を促がし、賃銀基金をも擴大させていくといった擴大均衡の過程を畫きだしているのである。⁴⁾

この有機的成長の過程に對應する主體的側面として、マーシャルは經濟騎士道を中心とする經濟倫理を唱えた。それは企業者がその經濟活動にあって、努力を投入して組織を生産することに意義を認めて、利潤の轉化過

程を促進する態度を要請したものにほかならない。企業組織への奉仕者たる本分に徹することを説いたものであった。これはその有機的成長の經濟理論の系論ともいふべきもので、經濟理論を超えた形而上學に類するものではない。

マーシャルの有機的成長の經濟理論の骨核は、このよ
うなものであった。社會進化の一局面としての經濟成長
の過程を廣い視野にたつて總合した業績は否定しうべく
もない。⁵⁾その理論が、分析次元において、後來の經濟學
者による批判にさらされたとしても、その問題のつかみ
方において、社會科學としての經濟學のあり方を明示し
ていることは、今日においても、率直に認めてよいであ
ろう。マーシャルの分析理論はすでに過去のものである
としても、經濟學者としてのマーシャルはいぜんとして
その偉大さを失っていない。その生涯の仕事を省みるこ
とは、われわれに前進への意欲をかきたてる契機になる
と思ふ。

- ① A. Marshall, *Principles of Economics*, 8 ed. London 1920, Bk. II, ch. II, Bk. IV, ch. XIII.
- ② T. Parsons, *Structure of Social Action*, 1937, 2 ed. Illinois, 1949, Pt. II, ch. IV, p. 130~141.
- ③ A. Marshall, *Principles*, Bk. VI, ch. IV, p. 583 n.
- ④ *op. cit.* Bk. VI, ch. VIII, p. 625~626.
- ⑤ *op. cit.* Bk. VI, ch. II, Appendix J.
- ⑥ マーシャルの業績を高く評價したのは、シュンペーター (J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, p. 1051) などの評價は、ロビンズのマーシャルに動態論的な見解 (R. F. Harrod, *Towards a Dynamic Economics*, London 1946, p. 15) と對立しているが、わたしはシュンペーター説がマーシャル理論の性格をつかんでいると思う。またピグウがマーシャル理論をただ「長期理論」と見て、それが「發展の理論」であることを強調しながら (A. C. Pigou, *Alfred Marshall and Current Thought*, London 1953) マーシャル説と比べて、不十分な性格だけではなから考えている。

(一橋大學教授)